

スケジュール変更は、学生の学修時間の確保を達成できているか

筑波大学 大学院 金利先

インターンシップ期間: 2014年9月～2015年2月

■ 1. はじめに

就職活動スケジュールが、2016年春の卒業予定者から大きく変わる。そのニュースを大学ホームページで知った当時大学4年生の私は、それをどこか他人事のように捉えていた。大学院進学を選択した私にとっての最大の懸念は、大学院における研究と就職活動の両立の厳しさであって、時期変更がもたらす変化についての関心は薄かった。両立の負担を軽減するため、もともと早期から就職活動の準備をすることを念頭に置いていた。

私は研究生生活の傍ら、夏季インターンシップ頃から就職活動準備を進めた。しかしインターンシップを経験できた現在でも、就職活動への不安は完全には払拭できず、学業に専念できているとは言い難い。スケジュール変更の主な目的は、学生の学修時間の確保である。研究の傍らインターンシップなど就職活動準備をしながら、この目的は果たされているのかと疑問を抱いている。

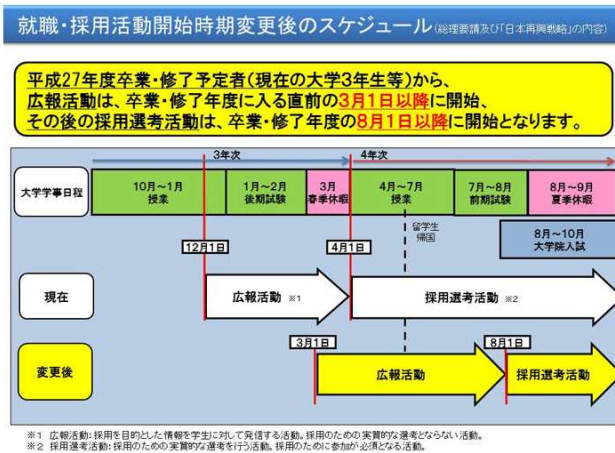
そこで本レポートでは、就職活動時期の変更は、学生の学修時間の確保という目的を達成しているのか、について考察する。スケジュール変更をどう捉えているかを、まず筆者の周囲の学生のインタビューを通してうかがった。それを踏まえ、ディスコのインターンシップで得られた調査データをもとに、さらに実態の全体像を捉え直すことに努める。同じ学生、そして就活生の立場から、できるかぎり学生の切実な思

いを探った。

■ 2. 就職活動時期変更

2016年卒業予定者からの就職活動時期変更は、「日本再興戦略」において政府方針として決定された。採用広報活動開始は「3年生の12月」から「3年生の3月」へ、選考活動の時期は「4年生の4月」から「4年生の8月」へと繰り下げられた。

図1 就職・採用活動開始時期変更



就職活動の早期化・長期化は、学業に支障をきたすことが懸念され、スケジュール変更によって学生は学業に専念できる時間を確保できることを期待している。また近年、日本人の海外留学が減少しつつあるが、そのなかで帰国後の就職活動が懸念材料である学生の割合が多かった。今日、企業の海外展開が加速するのに伴い、グローバルに活躍する人材が求められている。就職活動時期の変更が、留学等への参加の促進につながると期待される。

■ 3. 学生の実態

就職活動解禁時期の繰り下げは、先述したように学生の学修時間の確保を目的としている。今年度はインターンシップが夏季のみならず秋季・冬季にも開催されるほど、企業の動向は変化し、それに伴って学生の就職意識が早い段階から形成されている。

そうしたなか就職活動時期変更は、本当に学生の学修時間の確保を実現できているのだろうか。以上の問題意識に基づき、学生へのインタビューを実施した。拾い上げた学生の生の声に加え、調査データの分析を通して、さらに学生の実態に対する考察を深めていきたい。

3-1. インタビューから見る学生の実態

私立大学に通う Aさんは、大学2年次に現在の大学に編入した。編入学の場合、3年次以降に編入先の大学で取得する単位が通常の学生に比べ多い。Aさんは、「単位取得と就職活動がバッティングしなくなったことがうれしい。そのように感じる編入学生は周囲にも多い」と話す。学修に十分な時間があてられ、就職活動によって学業がおろそかになることを避けられているようだ。スケジュール変更に関する政府の思惑が達成されている例だと言える。

大学院修士課程1年に在籍する Bさんは、スケジュール変更について認識しているものの、本業である研究に専念しているようだ。Bさんは、「就職活動時期の繰り下げにあわせて、就職活動の開始も遅くしようと意識した」と語る。Bさんのように、就職活動中に研究にあてる時間がほとんど取れなくなることを危惧し、時期繰り下げで生じた時間を積極的に学業に費やす学生も少なからずいる。学業に力を注ぎたい学生にとっての大きな懸念は、就職活動中に学修時間が確保できないことであるのだろう。就職活動解禁時期の変更自体は大した問題

ではなく、むしろ準備を含めた就職活動の長さこそ負担となるのかもしれない。

AさんとBさんにとって就職活動時期の繰り下げは、各々の学業を後押しするものになったと言えるのではないだろうか。その一方で、スケジュール変更への消極的な見方も目立った。スケジュール変更を好ましく捉えない学生は、それをニュースで知ったとき、不安を覚えた者も多く、そうした学生ほど早くから準備を始めることによって、就職活動への不安を軽減させようとしているように見えた。

文系大学院生 Cさんは、時期の繰り下げによって生じた時間について「就職活動準備に十分な時間をかけられるようになった」と話す。夏季インターンシップ時期に合わせて、自身の就職活動準備を開始し、インタビューを行った11月時点で志望業界もある程度決まっていた。一方で、自身の就職活動準備について「時間がたっぷりある分、だらだらと続いている」として、なかなか準備から離れられず、それが多少なりとも学修時間に支障をきたしている現状も見受けられた。

就職活動時期の繰り下げは、本来学生の学業を勧めるものである。しかしながら、時期の繰り下げによって生じた時間を就職活動準備にあてている結果、スケジュール変更が就職活動の準備を推し進めている実態が、Cさんの例からうかがえた。スケジュール変更がもたらした影響は、Cさんのような学生個人への影響にとどまらない。次に紹介するのは理系大学院生 Dさんの例である。Dさんのゼミでは、毎年秋に開かれる学会には全員参加が義務付けられていた。しかしインターンシップなど就職活動準備を考慮し、今期から希望制をとるようになったという。

Dさんの例は、スケジュール変更が学修時間を確保するどころか、それに伴い学生の就職活動準備に配慮する大学が出現していることを

示す注目すべき実態である。こうして、スケジュール変更が学業に手助けとなった例、そして逆に支障をきたしている例を紹介した。これらを踏まえ、調査データを通して、学生の実態を捉えなおしてみよう。

3-2. 調査データから見る学生の実態

学生は、政府の思惑通り学業に専念する時間を増やしているのだろうか。時期の繰り下げに伴い学生が学業に専念する時間が増えているのかを知る上で、まず基準となる大学生の学業に費やす平均の時間について把握しておく必要がある。総務省の「社会生活基本調査」(図2参照)によると、日本の大学生の学業にあてる時間は、小学生の5時間05分よりも少ない一日平均3時間33分であった。教養を高めるための学修時間も29分と最も少ない。

図2 一日の学業時間／週平均

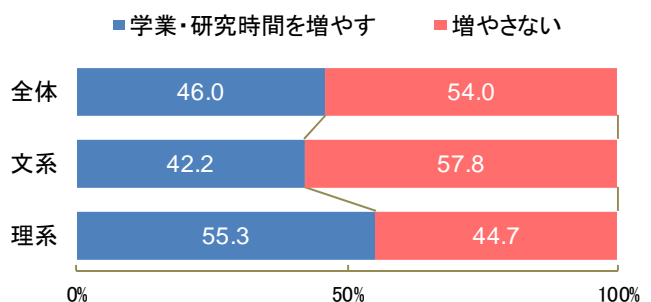
	学業時間 (学校の授業、宿題、塾など)	教養・知識を 高める 学修時間
小学生(10歳以上)	5時間05分	36分
中学生	5時間55分	51分
高校生	5時間41分	48分
短大・高専生	4時間22分	36分
大学生	3時間33分	29分
大学院生	4時間23分	49分

出典:総務省「社会生活基本調査」(2011年)より

調査データ(図3)によると、就職活動の開始が遅くなった分、学業や研究時間を「増やす」と回答した学生は全体の46.0%。「増やさない」と回答した学生は54.0%であった。先ほどの大学生の平均的な学修時間を踏まえると、少ない学修時間を維持あるいは減らす学生が半数を占めている。依然として学修時間が少ない上に、学修以外に時間をあてる学生が多いという現実を表している。

では学業に費やす時間を「増やさない」と回答した学生は、時期繰り下げによって生じた時間を何に費やしているのだろうか。図4によると、82.7%の学生が就職活動準備にあてている。なかでも文系学生は、94.4%が就職活動準備に費やしている。インタビューをおこなった文系大学院生Cさんのほかにも、就職活動準備にあてる時間を増やした学生が比較的多いこと

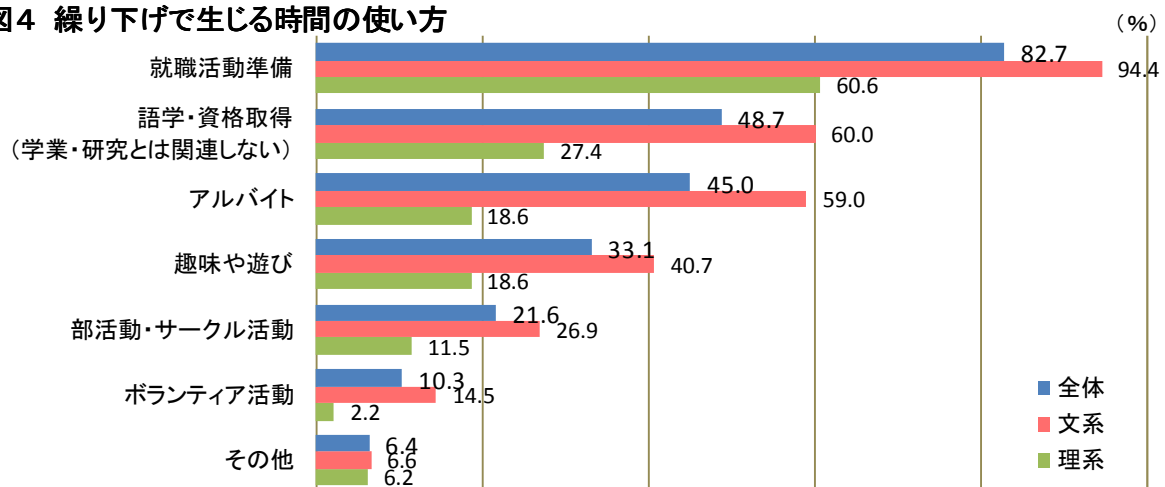
図3 繰り下げで生じる時間について



出典:ディスコ「2016年卒学生の早期就職意識調査」

(2014年10月実施)より

図4 繰り下げで生じる時間の使い方



※「学業・研究時間は増やさない」と回答した学生に尋ねた

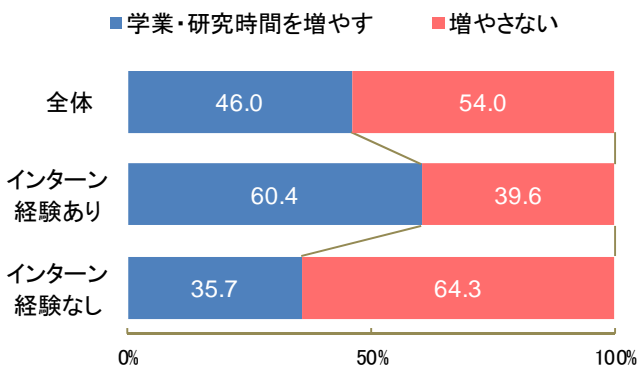
出典:ディスコ「2016年卒学生の早期就職意識調査」(2014年10月実施)より

がデータから読み取れる。

学業の時間を「増やさない」学生の多くが、就職活動準備に時間をあてていたという上記の事実は、就職活動準備に力を注ぐ学生は学業に十分に手が回らず、学修時間が確保できないということを示唆しているように見て取れる。しかし次に見るデータによると、必ずしも就職活動と学業との両立が困難であるとも言えない。

図5のインターンシップ有無別のデータでは、繰り下げで生じる時間に関して、インターンシップの参加経験のある学生の割合が、参加経験のない学生を上回った。インターンシップなどを通して、ある程度就職活動準備が整っている学生は、少し余裕が生まれ学業にあてる時間を確保できるということであろうか。個々人の学修時間の増加要因はともかく、学修時間を増やす学生のなかで、就職活動準備も怠っていない学生もかなりいることが、このデータから読み取れる。

図5 繰り下げで生じる時間（インターン経験有無別）



出典：ディスコ「2016年卒学生の早期就職意識調査」
(2014年10月実施)より

3-3. 学生の学修実態

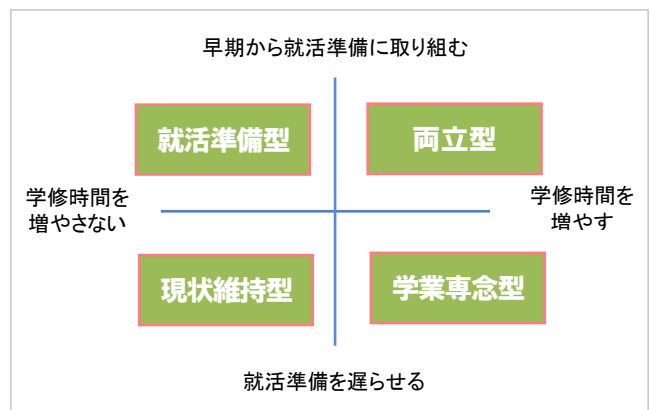
以上のインタビューや調査データから得られた情報をもとに、スケジュール変更に伴って学生をいくつかのグループに類型してみた。本レポートは、就職活動のスケジュール変更に伴う学修時間の確保をテーマとしているため、学生の学修時間の確保を一つの軸とする。そして学業との両立が問題となる就職活動の準備具

合をもう一つの軸として設ける。

まず学修時間に関しては、増やすグループと増やさないあるいは減らすグループに分けられる。調査データで見たように大体半数ずつであった。増やすグループについては、学業に専念するグループと学業と就職活動準備をできるだけ両立しようとするグループに分けることができる。

一方増やさないグループも二つに分けることができる。就職活動に注力するグループと、学業にも就職活動にもそれほど力を注がないグループである。そのグループを図で示すと以下のとおりである。

図6 2016年卒就活生の類型 筆者作成



右上の両立型は、早期から就職活動準備に取り組むばかりでなく、学修にも一定の時間を割く学生が該当する。右下の学業専念型には、就職活動時期の繰り下げで生じた時間を、学業にできるだけあてようとする学生が該当する。

左上の就活準備型は、スケジュール変更で生じた時間を就職活動準備に活用する学生である。左下の現状維持型は、スケジュールが変更されたからといって焦ることもなく、マイペースに課外活動やアルバイトに時間を費やして過ごす学生などが含まれる。

4. 考察

以上のように類型化した4つのグループ（「両立型」、「学業専念型」、「就活準備型」、「現

状維持型)を基に、スケジュール変更に伴う学生の実態について考察する。

インタビューを行った A さんは授業単位の取得のため学業に時間を費やす一方で、インターンシップを夏季から開始しており、類型化した学生グループの「両立型」に属するといえる。さらにインターンシップ経験有無別の調査データ(図5)においても、比較的多い学生が学業と就職活動準備を両立できるよう努めていることがうかがえた。

就職活動時期の繰り下げに応じて自身の就職活動も遅らせ、それまでは学業に注力とした B さんは、「学業専念型」だといえる。図3で見たように、約半数の学生は B さん同様、学業に費やす時間を増やすとしていた。

C さんの例は、夏季インターンシップを起点として自身の就職活動準備が長引き、なかなか学業への時間を確保できていない状況を映し出した。図4でみられた、学修時間を増やさず、繰り下げで生じた時間を就職活動準備にあてている学生の典型例が A さんであるといえ、「就活準備型」にあてはまる。

理系大学院生の D さんも、夏ごろからインターンシップに積極的に参加していた。例年通り彼の所属するゼミの学会参加が義務であれば、彼は就職活動にも学業にも時間を費やす「両立型」に属していたであろう。しかし学会参加が希望制になったことにより、そうした学生が「就活準備型」に転じていることが、今年度の特徴だといえる。

本レポートでは、「現状維持型」に属する学生をインタビューを通じてうかがうことができず、またカテゴリー上の学生の分布を示すことができなかった。しかしインタビューを通して学生の実態を垣間見ることができたのは一つの成果であったといえる。特に C さんや D さんの例は今年度の特徴を表していると考えられる。つまり、今年度のスケジュール変更に伴って例年より「就活準備型」にシフトする学生が目立つということであった。このように本レポートを通して見えてきた実態は、今回のスケジュール変更は、学修時間の確保という目的を達成するどころか、一部では就職活動準備を促進するという皮肉な結果を招いたことであった。